

世界文学を学ぶ会 第3回 赤毛のアン(Anne of Green Gables)

11月17日(水) 午後1時30分~3時 アキシマエンス校舎棟 201号室

NHKの「アンという名の少女」



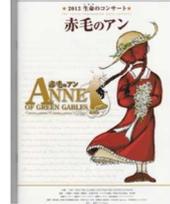
なぜ男が少女の物語に傾注するの？

事前準備の数々

出版100周年。NHKの翻訳者・松本侑子と女優・松坂慶子の英語番組を視聴

最初の翻訳者・村岡花子の出生地の甲府を訪ねる

松本侑子の「原書で読むアン講座」へ。劇団四季のミュージカル鑑賞



旅費捻出の舞台裏

物語のあらすじ

プリンスエドワード島の舞台を巡る

物語に合せた写真約100枚の紹介

本場のミュージカルを取材

希望を贈るアンの言葉の数々

夢は必ず実現できる！

雷で帰国日が延期となったが・・・

東京国際フォーラムでミュージカル(音楽劇)に出演



生命のコンサート
ミュージカル
音楽劇 赤毛のアン



シニアこそ読もう『赤毛アン』——心のみずみずしさを再び——

タイトル (赤字はパワーポイントによる写真の説明です)

NHK で始まった連ドラ「アンという名の少女」

番組のカット

先月末から NHK で毎週日曜日の夜「アンという名の少女」との連続ドラマが始まりました。

私も何回か番組を見てきましたが、現在までのところでは原作からかなり脚色された部分もあるような気がします。先々週の場面では黒人社会の生活を取り上げていましたが原作にはそんな場面はありません。でも現代が抱える人種差別問題や多様性の文化の時代といった面も取り入れ、時代に合わせより深く、と試みたのかもしれませんが。ネット情報によれば、ヒロインのアン役は応募者 1400 人の中から選ばれたといえます。

さて、名作『赤毛のアン』は、日本でも愛読者は多く、終戦直後から多くの女性、特に少女たちに読まれてきました。

2008 年はその原作の出版からちょうど 100 年にあたりました。そこで「ドン・キホーテ」「風と共に去りぬ」に次ぐ文学紀行の 3 作目としてその作品の舞台、カナダのプリンズエドワード島に飛んだ次第です。これからご紹介する現地の作品の舞台の写真が、テレビ番組を見るのにお役に立てればなんて願っております。

なぜ年老いた男が少女の物語に傾注するの？

実を言うと物語の舞台プリンズエドワード島を訪ねるにあたって最初は少しだけ恥ずかしさもありました。

「いい年をしたオジサンが、なんでわざわざ少女物語の舞台なんか訪ねるんだい？」。どこかで“悪友”の冷やかし声が聞こえてくるような気もしました。でもそのころ脳科学者の茂木健一郎氏が「自分も『赤毛のアン』のファンだった。でも周囲に知られるのがいやだったので隠れて読んでいた」なんて発言もありました。

脳科学者と少女小説——なんて意外な組み合わせも面白いですが、私自身もそんな発言に心を強くさせられたものです。

事前準備の数々

旅の出発の年には、マスコミ界でも出版 100 周年を記念するいろんな企画が生まれ、旅行社もキャンペーンツアーを催していました。

NHK の教育テレビでは 4 月から 6 月まで「3 ヶ月トピック英会話『赤毛のアン』への旅——原書で親しむ Anne の世界」とのタイトルで女優の松坂慶子と作家・翻訳家の松本侑子を軸に英会話の講座が組まれていました。

ところで、「赤毛のアン」を日本人で最初に翻訳したのは山梨県に生まれた村岡花子ですよね。こちらもちょうど NHK の朝ドラで「花子とアン」とのタイトルで取り上げられていましたよね。

原作「Anne of Green Gables」を直訳すれば「緑の切妻屋根のアン」となるでしょう。彼女

は当初「窓辺の少女」、「窓に寄る少女」「夢見る少女」といろいろ考えたようですが、結果的に当時大学生だった娘の「『赤毛のアン』がピッタリだわ」との強い薦めに従って決まったのだといえます。

この名訳！

もしこれが直訳の「グリーン・ゲイブルズのアン」あるいは「緑の切妻屋根のアン」だったら、これほどまでに日本の読者を惹きつけなかったにちがいありません。「赤毛」はブロンドにも通じ、黒髪の自分たちとは違う異国の少女へのあこがれの的なものも含まれていたのでしょう。「あかげのあん」との母音の繰り返しも耳にこころよく聞こえます。

以来、これまでに『赤毛のアン』は何人にもよって翻訳されてきていますが、直近では松本侑子。私はその後、都内で彼女が主宰する『原書で学ぶ赤毛のアン』の受講生として3回ほど通ったものでした。**記念写真**

また物語は日本国内でも何回もミュージカルとして上演されています。そこで出発前に**劇団四季**のミュージカル「赤毛のアン」の鑑賞のため浜松町まで足を運びました。

パンフレット 今思えば“よくよく、ぞっこん打ち込んだものだ！”と自分でも思います。でもその結果が後ほどお話しする思いもかけなかった次の展開をもたらしてくれたのです。

物語のあらすじ

プリンスエドワード島の地図とその拡大図

最初に物語のあらすじをご紹介します。

——ときは19世紀末。ところはカナダの北部東海岸にあるプリンスエドワード州。島のアブオンリー村（実際にはキャベンディッシュ村）にグリーン・ゲイブルズという家があった。グリーン・ゲイブルズとは「緑の切妻屋根」の意。

家には60代のマシュー・カスバートと50代のマリラ・カスバートという独身の兄妹が暮らしていた。子どものいない二人は、年老いてくるマシューの農作業の手伝いのために、孤児院から男の子を引き取ろうと考えた。ところが、手違いでやってきたのは赤毛でそばかすだらけでやせっぽちの女の子だった。

アン・シャーリー。11歳。

マリラは、女の子は農作業の役に立たないと追い返そうと考える。ところが、アンの生き生きとした明るさ、可愛いおしゃべりにまずマシューがとりこになり、ほどなくマリラも彼女の生い立ちに同情、不思議な個性に魅せられ、引き取って育てることになった。

アンは島の美しい自然とマシューとマリラの愛情のなかですこやかに育っていった。学校では同級生のダイアナとの間に友情を培い、「ニンジン、ニンジン」と赤毛をからかわれた男子生徒のギルバートには石版で頭を叩きつけた。こうして数々の失敗や成功のエピソードを繰り広げながら、担任教師、牧師夫妻、そして周囲の多くの大人たちからの愛情で、彼女は優しく賢い16歳の娘へと成長していった。

半面、それまで世間づきあいが苦手で、兄と妹の二人だけでさびしく生きてきたマシューとマリラも、アンを育てていくなかで、人を愛する喜び、人から愛される幸せを知って大きく変化、心豊かな大人へと成長していった。

美しいものに憧れる乙女心。数え切れない失敗。それでも“想像力”を駆使し、決して希望を失わず、すべてに前向きに生きていくアンに読者は感動し勇気づけられる——とい

ったところですね。

ところで、カナダの北端に位置するプリンスエドワード島へは直行便はありません。そこでこの取材の旅は、成田からトロントまではジャンボ機で。トロントに一泊して翌日 70 人乗りほどの小型機で島の首都シャーロットタウンに向かったのです。**機中からのシャーロットタウンの光景**

プリンスエドワード島について少し述べますと、大西洋岸の北部にあるカナダでは一番小さな州。島の名前はイギリス国王ジョージ 3 世の王子にちなんで付けられた。1864 年、カナダ連合政府の代表が集まって、カナダ連邦の結成についての会議が開かれた歴史的な場所。なによりもこの島を世界的に有名にしているのは小説『赤毛のアン』。作者ルーシー・モード・モンゴメリーの故郷であり、物語に登場するアンゆかりの場所があり、美しい牧歌的な光景が広がっています。

島は「波間に浮かぶゆりかご」の形をしています。アンの育ったセントローレンス湾に面したキャベンディッシュへは、島の反対側にある州都シャーロットタウンから車で約 40 分。道路の両側には、赤土と緑ののどかな田園風景が広がっています。

州政府は私が訪れた 2008 年を「アン 100 周年の年」と決めていました。シャーロットタウンの空港や街のあちこちにはポスターや案内板が目につき、書店には「アン特集」の本や写真が並べてありました。

まずは物語の中心舞台、アンが生活し育てられた**グリーン・ゲイブルズ**から紹介しましょう。

6 月半ば。訪れが遅い北国カナダの夏。グリーン・ゲイブルズの**りんごの花がちょうど満開**でした。孤児院にいたアンが初めてグリーン・ゲイブルズに着いたのも 6 月。りんごの花が白く咲きあふれていたころでした。**一人で置き去りにされたケンジントン鉄道駅**から、マシューが手綱をとる馬車でやってきたのです。

ハウスには各国からの見学者が押しかけていました。地元カナダの各地から、お隣のアメリカから。ヨーロッパは主に東欧の国々、アジアは日本、中国、韓国からが多いという。日本からは若い女性と中年の婦人のグループが目立っていました。それぞれ少女時代また青春時代に読んだアンの魅力に惹かれて訪ねてきたのでしょう。

「プリンスエドワード島は、この世でいちばん美しいって聞いていたから、住んでみたらどんな感じが想像したものよ。でも、本当に住むとは思いませんでした。夢が実現するってすてきね」（第 2 章 マシュー・カスパートの驚き）

以下、引用する言葉は松本侑子の訳によっています。

アンは自分の目に映る周囲の木々や森、道路や湖水にも“想像力”を発揮して次々と名前を付けていきました。“腹心の友”ダイアナと通った**「恋人たちの小径」**は新緑のまっただなかでした。こぼれ日が路面に映り揺れています。高い樹木が密集した**「お化けの森」**では、**倒れた古木**がいかにもその趣をかもし出していました。

「アンをめぐる旅」の出発点ともいべきこのグリーン・ゲイブルズの家は、作者モンゴメリーの親戚が実際に住んでいたものでした。現在は小説の記述どおりに再現され、100

年前の息づかいが感じられるようになっていきます。家の周囲にはいろんな種類と色の花々が咲いていました。

あらすじでもご紹介しましたが、家には 60 代のマシュー・カスバートと 50 代のマリラ・カスバートという独身の兄と妹が暮らしていました。子どものいない二人は、年老いてくるマシューの農作業の手伝いのために、孤児院から男の子を引き取ろうと考えました。ところが、手違いでやってきたのは赤毛で そばかすだらけのやせっぽちの 11 歳の女の子でした。アン・シャーリー。

マリラは女の子は農作業の役に立たないと追い返そうと考えます。ところが、アンの生き生きとした明るさ、可愛いおしゃべりにまずマシューがとりこになり、ほどなくマリラも彼女の生き立ちに同情、不思議な個性に魅せられ、引き取って育てることになったのです。

・・・マシューは口ごもった。「だが、そのう、あの子を引きとるのは、やっぱり難しいかのう」

「当たり前ですよ。あの子が私たちの何の役に立つんですか」

「でもなあ、わしらが、あの子の役に立つかもしれないよ」(第 3 章 マリラ・カスバートの驚き)

「わしらが、あの子の役に立つかもしれない」——なんという温かなマシューの心でしょうか！やがて、マリラもアンを心底から愛するようになり、物語が進むにつれて彼女の情愛も一層深まっていきます。

アンは感激の「ああ」を連発すると、マリラの腕の中にぱっと飛びこみ、血色の悪い頬に、熱烈なキスを浴びせかけた。マリラにとって、子どもの方から顔にキスされたのは、生まれて初めてだった。またもや、例のはっとするような甘い心地に揺さぶられた。(第 13 章 待ち焦がれる愉しさ)

今まで子どもを扱ったことのないマリラが、戸惑いながらもアンのしつけをしていく。話し始めたら止まらないアンのおしゃべり。愛していながらも、不細工がゆえにやさしく振る舞えないマリラのアンに投げかける言葉も楽しいですね。

「アン、一つ言えることはだね」マリラが言った。「バリー家の屋根から転がり落ちて、あんたの舌は、かすり傷一つ負わなかったってことだ」(第 23 章 アン、名誉をかけた事件で、憂き目にあう)

アンはダイアナの家のお茶会で、仲間とのひよんな駆け引きから、引くに引かず、屋根の棟(むね)を歩き、転げ落ちて足首を骨折したのです。アンの具合を気づかいながらも、しゃべり出したら止まらないアンの日常をちょっと皮肉って見たのでしょうか。

ときどき出てくるアンの無鉄砲さは夏目漱石の『坊ちゃん』をほうふつとさせます。正義感にあふれ、負けん気の坊ちゃんは「そこからは無理だろう」とからかわれて、2 階から飛び降りて怪我をした。まったく同じような場面の設定です。

初めはアンを家におくことを断っていたマリラも心の内ではアンの無事を心配していた。この時点ですでにアンが自分たちにとってどんなに大切な存在になっているかに気づいてくのですね。

半面、それまで世間づきあいが苦手で、兄妹だけでさびしく生きてきたマシューとマリ

ラも、アンを育てていくなかで、人を愛する喜び、人から愛される幸せを知って劇的に変化、心豊かな大人へと成長していくのです。

3人がいつも語り合っていた1階の居間。台所。アンがダイアナを招待したお茶会で間違えてスグリ酒を出した食器棚。2階の東向きのアンの部屋には明るい色の少女用ベッドのほか、マシューがアンに贈った、袖がふくらんだパフスリーブの衣装もベッドの上にあります。1階の居間から外を覗く。別棟(むね)の大きな納屋には当時の農作業道具が陳列され、中庭に置かれた馬車が100年前を忍ばせていました。

手前の広い駐車場には大型の観光バス4台と20台ほどの自家用車が駐車できるといいます。「シーズンになると、ここが一杯になるんです」と観光ガイド。

納屋の建物の中にいた受付の女性。モンゴメリーが使っていたタイプライターが展示され、短時間の紹介用映画も見られるようになっていました。

このキャベンディッシュ村には、作者ルーシー・モード・モンゴメリーの生家もあります。家の中のもの<本棚、陳列された原稿、ストーブ、ピアノ、カードを置く棚、孫娘と私の記念撮影など。

外に出るとグリーン・ゲイブルズへの案内板、教会、郵便ポスト、一時期、彼女が働いていた郵便局。受付での観光案内の女性。

街に入ると大きな書店が。「アン100周年を記念する展示も(ガラス越しに撮ったので反射していますが・・・)

PP第2巻へ

モンゴメリーが葬られた墓地は今、国立公園となっています。「輝く湖水」、その向かいにはグリーン・ゲイブルズ博物館が緑のなかに落ち着いたたたずまいをしていました。

少女アン、meとの記念撮影(観光用に何人かのアンが待っているのです)

茶色の土の畑、牧草地の上の青空、丸くまとめられた牧草(ゆうに100キロ以上はあるでしょう)と牧草を運ぶトラクター

ミュージカル公演を取材

芸術劇場の建物と案内看板

島に着いた翌々日からは物語の舞台の本場の芸術劇場でのミュージカル公演が始まりました。

毎年、夏になると催されてきたという公演は44回目。100周年のこの年は特に力が入っているようでした。ガラ公演に先立って、全キャストが揃ってのサイン会と記者会見が行われました。私は日本での“アンブーム”を伝えた後、主役のアン、準主役のマシューにインタビューしました。

サイン会の受け付け アンとダイアナ マシューとマリラ

アン(アミー・ワリス):「記念すべき年の主役をいただいて光栄です。おしゃべりでチャームング。勇気もある。どこまでも希望を失わないアンは、永遠に私たちの“生き方の鏡”だと思います」

マシュー(サンディ・ウィンスビー):「高齢になるにつれて、身体だけでなく心まで枯れ

てしまう人も多い。年を取るほどにアンのような『心のみずみずしさ』が必要になってく
ると思う。作品は少女たちだけでなく、すべての大人に通ずることを訴えたい」

インタビューが終わると私が差し出した原書の表紙裏にハートマークをつけてサインし
た彼女の言葉は：“To Takeshi: Much love from Anne Shirley, Amy Wallis”（武さんへ：
心からの愛をこめて——アン・シャーリー〈アン役を演じたアミー・ワリス〉より）だっ
た。

＜原書のサインの紹介＞

日本の劇団四季のミュージカルもカナダのも、舞台の設営は8割方同じように思えまし
た。どちらの公演でも、アン役の歌唱力、おどおどし口下手なマシュー役の演技が際立っ
ていました。アンがマシュー、マリラの愛情の中で健やかに成長していく半面、育てる二
人は年老いていく人生の無常。人間の情愛の深さ。マシューが亡くなり、アンが大学進学
を断念、マリラを支え、再び自分の道を切り開いていこうとする最終幕は、観客の誰もが
涙を誘われ、感動を禁じえません。

ミュージカルのすばらしさは、舞台の設営とバックミュージックが、そして出演者の演
技と歌唱が、活字だけでは表現できない情感を高めてくれることにあります。映画、ミュ
ージカルの特性を十分に堪能していくのに『赤毛のアン』は最適の文学作品の一つだと思
ったものです。

主人公の魅力といえば、そのかわいなおしゃべりとあふれる想像力です。
そこで最後に私が感動、感銘したアンの言葉をいくつかご紹介していきます。

少し喉がかれてきたのでここで皆さんにも参加していただきたいと思います。これから
スクリーンに映る五つの言葉をどなたか一人一つずつ大きな声で読み上げていただけませ
んか。日本語の部分で結構ですが、せっかく原書の英語もあるので出来る方は一緒に読ん
でいただくと、会場の雰囲気も少し上がってくると思うのでぜひお願いします。

“I’m so glad it’s a sunny morning. But I like rainy morning real well too. All sorts of
mornings are interesting. Don’t you think? You don’t know what’s going to happen
through the day, and there’s so much scope for imagination”

「いいお天気朝で、とても嬉しいの。でも雨の朝も、好きよ。どんな朝でも、ワクワク
するわ。今日一日、これから何が起きるか、想像の余地があるでしょう」（第4章 グ
リーン・ゲイブルズの朝）

すべてを前向きにとらえる姿勢

“It’s been my experience that you can nearly always enjoy things if you make up your
mind firmly that you will. Of course, you must make it up firmly.”

「私の経験から言うと、物事は楽しもうと思えば、どんな時でも楽しめるものよ。もちろ
ん、楽しもうと固く決心することが大事よ」（第5章 アンの生い立ち）

上と同じ

“It gives you a lovely, comfortable feeling to apologize and be forgiven, doesn’t it? Aren’t

the stars bright tonight?”

「人に謝って許されるって、ほっとして、気が楽になるわね。今夜は、星がきらきらしているわ」(第 10 章 アンのお詫び)

少し悪いことをしたんですね。それを謝った時の心の安心感、解放感ですね

“Anne, Bedrooms were made to sleep in.” “Oh, and dream in, too Marilla. And you know one can dream so much better in a room where there are pretty things.”

「・・・寝室は、眠るためにあるんだよ」

「まあ、マリラ、夢を見るためでもあるわ。美しいものに囲まれた寝室の方が、いい夢がみられるでしょう？」(第 16 章 お茶会、悲劇に終わる)

少女らしく夢のある言葉ですね

“Marilla, isn’t it nice to think that tomorrow is a new day with no mistakes in it yet?”

「明日は、まだ何の失敗もしていない新しい一日だと思うと、ほっとするわ」(第 21 章 風変わりな香料)

自分の失敗をすなおに詫げる純粹さ。また失敗の多い日々の生活のなかでの乙女のやさしい心に読者は親近感を抱き、さらに、明るく毎日を生きようとするその考え方を、自らの人生に取り込もうとするでしょう。

次は英語がありません。最後の部分なので私が読ませていただきます。

「クイーン学院を出た時は、私の未来は、まっすぐな一本道のように目の前にのびていたの。人生の節目節目となるような出来事も、道に沿って一里塚のように見わたせたわ。でも、今、その道は、曲がり角に来たのよ。曲がった向こうに、何があるか分からないけど、きっとすばらしい世界があるって信じるわ」

(第 38 章 道の曲がり角)

最終章——競争の激しい大学への奨学金試験を勝ちとり、洋々とした前途が開けた矢先にマシューの突然死と、グリーン・ゲイブルズを手放さなくてははいけないというマリラの苦悩・・・。それを知ったアンは、ここまで育ててくれた二人への恩と愛情に、進学をあきらめ村に居残ることを決める。成長したアンという言葉です。

シャーロットタウンからキャベンディッシュへの道は、なだらかな上り坂と下り坂、曲がり道の連続でした。順調に見える人生も、途上で何が起こるか分からない。人生の岐路で、思いがけない障害に直面することもある。そのときに、アンのようにすべてを前向きにとらえ道を切り開いてほしい——これこそモンゴメリーが読者に伝えたかったメッセージでないかと思ったところです。

滞在の最後の日にはシャーロットタウンの街の見学をしました。

シャーロットタウンの市庁舎ですね。サイクリングの大会が島で行われていてカナダ全土から選手が集っているようでした。(2枚)。島の海岸(大西洋岸)。州議会の議事堂。メイプル(楓ですね。カナダの国旗にもなっています)。市バス2台。図書館。入り口の案内(英語とフランス語の二カ国語で=カナダはこの2カ国語が公用語となっているのです)。室内はどこも共通するような雰囲気ですね。日本語図書のコーナー。プリンスエド

ワード大学2枚。たまたま出会わせた3組の新婚カップル。空港の出発便の掲示板（後の懇談会の時にエピソードをお話します）。空港内の荷物受け取り場。日本の田舎空港よりも小さいですね。「ようこそ」の掲示があります。どれほど日本からの訪問者が多いか推測されてきますね。観光用ポスター。

夢は必ず実現できる！

島をめぐる旅のなかで車椅子の日本婦人に会いました。Kさん。九州の宮崎から羽田、成田、トロントの空港を経由して州都シャーロットタウンへ。60歳の誕生日を祝い、娘二人が旅をプレゼントしてくれたのだといいます。リウマチで足が悪く、娘の一人が付き添って人生で初めてとなる海外旅行とのことでした。

「車椅子で大変だと思いましたが、カナダに着いてみると、障害者にみんなとても親切で感動しました。アンは40年前に村岡さんの訳で読んで以来、その舞台を訪ねるのが夢でした。アン・シリーズも全部読みました。プリンスエドワード島は、牧歌的な広々とした光景で心が洗われる思いです。空気も澄んでいて、持病のリウマチもあまり気にならなかった。何があってもくじけないアンの生き方は、40年来の自分の支えでもありました。送り出してくれた娘たちに、親切に面倒を見てくださったカナダの皆さんに心から感謝しています」と語っていました。

身障者にとって、旅は最高のリハビリだとも言われています。身体の移動に伴う自信と同時に、心の刺激とときめきも得られるからです。夢を抱いて努力していれば、いつかは実現できる。アンが教えてくれた一つの具体例と思ったものでした。

私は、今は“Seniors, be ambitious!”（シニアよ、大志を抱け！）の時代だと訴えています。旅には刺激と「ときめき」が詰まっています。本にも刺激と「ときめき」、さらに人間の生き方が詰まっています。読書はお金もかからない。物語の展開に胸を躍らせるなかで、いつのまにか心の若返りにつながっていることも多いのです。

読書の秋。地元にはアキシマエンシスのような素晴らしい総合図書館もできました。年を取ってから青春時代の本を読み直す。『赤毛のアン』に限らず、また新たな作品にのめりこんでみるのもいかがでしょうか。

古希を過ぎてミュージカルの舞台に立つ

プリンスエドワード島から帰国して5年後、思いもかけなかった unbelievable な展開が起きました。有楽町の東京国際フォーラムで「赤毛のアン」のミュージカルの舞台に出演したのです。 **ミュージカルの題字**

2013年11月2日、3日。昼の部と夜の部と計4回。主催は舞台芸術活動を通して青少年の育成と国際交流を進め国連を支援している内閣府認証のNPO法人「国連クラシックライブ協会」。 **ミュージカルのプログラム**には岸田外務大臣（現在の首相、内閣総理大臣ですね）、カナダ大使館広報部長などのメッセージも載っており、公演には来賓として外務省・環境省と14の大使館の関係者なども出席していました。その舞台に古希を過ぎた私が立ったのです。

いきさつはミュージカル「赤毛のアン」の出演者公募の記事が朝日新聞に掲載され、私

のプリンスエドワード島訪問を知っていた地元のシニアクラブ会長の「出演してみたらどうですか？」との声に押されてその気になり、オーディションに行ったところ、発声、ダンス、自己紹介の三つがあり、なんとこの歳（当時 72 歳）で合格したのです。私が『赤毛のアン』出版 100 周年の際に、物語の舞台に取材で行っている、といったアピールが考慮されたからのようです。

すぐに練習が始まりました。週 2 回ほど、参宮橋にあるオリンピックセンターに行き、午後 6 時から 10 時まで。初めはオープニングとフィナーレの舞台を飾る「アンダンス」に取り組みましたが、そこへ予期しなかった展開が出てきました。監督よりの三つの依頼があったのです。

- ① 休憩時間に作品の背景や歴史等について練習仲間に語ってください
- ② プログラムに「赤毛のアン」についてのエッセイを書いてほしい
- ③ 国連をサポートする団体として、フィナーレでの主人公アンのメッセージをいろいろな言語で世界に発信したい。ついてはその言語の一つスペイン語で観客席に挨拶してもらいたい

といった内容です。大事な役割を与えられ、本番前の週は連日、練習参加となりました。

- ① については、今日お見せしてきた写真の代表的な 20 枚ほどを大きく拡大して練習場の壁に貼り付けました。②では私の書いた**エッセイがプログラムの中に印刷された（最後の 3 行だけ読む。日野原重明氏の部分）**のです。③のフィナーレでのスペイン語の挨拶の際には、強いスポットライトを浴びて前方の客席がよく見えず、最初はちょっとあがってしまったのですが、2 回目からはなんとか重責を果たすことができました。

フィナーレでの挨拶（左から主人公アン、フランス語、スペイン語、韓国語、英語で挨拶した代表です。真ん中で黒い背広で話しているのが私です）

フィナーレの舞台（万歳）

舞台では宝塚の元スターや松竹歌劇団や劇団四季の出身の俳優など、さらに無名であってもここが登竜門となってやがて帝劇の「レ・ミゼラブル」の舞台に立つであろう、と思われる歌も踊りも有能な若い仲間と、古希を過ぎて都内でも有数の劇場の舞台に立つという貴重な経験ができたことは最高でした。

コーラスの音符もさっと拾えず、ダンスもステップを踏み間違えるなど、高齢による体力劣化は防ぎようがないと思ったところですが、若者たちとの交流の中で自分自身の心の若さが培われていったような気がします。

「明日という日はいつも新しいんだから！」と言うミュージカルの主人公アンの台詞。先月「風と共に去りぬ」でご紹介した「Tomorrow is another day」（明日はまた新しい出発の日）にピタリ通ずるような気がします。

辛いことがあっても悲しいことがあっても、前へ前へと進むアンのように、年はとって夢を抱き、前へ前へと進む人生でありたいと思ったところです。

以上で『赤毛のアン』についての講演を終わらせていただきます。

Thank you very much. 長時間のご静聴ありがとうございました。

<懇談会で>

アンの失敗のエピソード

孤児院にいたアンは、マシュー、マリラ兄妹の家で育ててもらえるようになり、学校にも通えるようになった。登校の初日に事件は起こった。クラスの男の子ギルバートから、彼女が最も気に入っている赤毛を「ニンジン、ニンジン」とからかわれた。怒ったアンは、使っていた石板を彼の頭上に打ち下ろしたのである。

石板といえば、終戦後 3 年目に私が入学した長野県の小学校のクラスでも使っていました。すべてに物資欠乏の時代だった。ノートは茶色がかったざら紙。教科書の一部さえも兄からの“おさがり”だった。つぎのあたって衣服は当たり前。昼食の弁当を持ってこられない同級生もいた。それでも休み時間には、黒板に相合傘の絵を描いて遊んでいたのが、アンのクラスとも共通していて懐かしい。

ギルバートは頭脳も性格もよい好男子だった。アンの反目は続くが、最終章で仲直りをします。後に続く「アン・シリーズ」では、二人は結婚をし幸せな家庭を築いていく。その出だしにこんなエピソードの伏線を置いたたぐいまれな作者の構想力！しかも「叩き割ったのは石板で、頭ではなかったが、真っ二つに割れてしまった」と、ユーモアのある表現も面白いですね。

そのほか、ちょっとした取り違えで、ダイアナにお酒（果樹酒）を飲ませてしまう話。小船に横たわって川に流されていく小舟でお姫様のまねをして溺れ死にそうになり、“心の敵”ギルバートに救出される話など、エピソードに事欠きません。日本文学の傑作に類した点があるのも、親しみを感ずるところです。

余談

プリンスエドワード島の州都シャーロットタウンの空港からトロントに戻る便は朝 6 時発の 1 日 1 便のみ。帰国の当日。まだ暗い空港に着くと、思いがけないニュースが待っていました。

「昨夜、トロントの空港がサンダーストーム（雷嵐）に襲われ閉鎖された。その流れで、今朝のトロント行き便はキャンセルになっています」

なんということだ！きょう帰れなければ帰国後の日本での予定が大幅に狂ってしまう。しかも、1 日延期によるホテル等の滞在費用も自然災害だから航空会社からは出ないという。

翌朝、今度は飛んだ 50 人乗りの飛行機でトロントに着くと、成田行きフライトのエコノミー席は満席だった。

とはいえ、航空会社としては、キャンセルで 1 日延びた我々も乗せなければならない。その結果、自分ほか何人かは空いていたビジネス席へ案内されることになった。食事も飲み物もレベルが上がった。シートはゆったりとゆとりもある。おかげでこの草稿も機内でゆっくりまとめられる、というおまけもついた。

人生の大事ではない。アンの言葉を軽く扱ってはいけませんが、次のように言えるかもしれません。「キャンセルという曲がり角の向こうには、思わぬラッキーが待っていた！」

旅の工夫の数々

当時定年 8 年目。68 歳だった私はシルバー人材センターで駅前の自転車管理の仕事を週 3 日ほどと、元の職場で週 2 日のアルバイトをしていましたが、基本的に年金生活者の旅です。費用は最低限に抑えなければなりません。

いつもどおりインターネットで格安便と格安ホテルの確保にあたったのですが、安いフライトはどれもすでに売り切れていました。やむをえず、たまたまオープンしたばかりの H.I.S. 昭島店に行き手続きを進めました。フライトは、ぎりぎりなんとか格安のを確保できました。カナダ航空。プリンスエドワード島往復で 108000 円。かなり安いです。でも、燃油サーチャージ（いわゆる石油の高騰に伴う乗客の負担金）として 40000 円も加算されていたので合計 148,000 円。

「少女物語」ともいわれる作品の内容からして、当初は「妻も一緒に」との予定でした。でも二人だとこれだけで 30 万円になります。さらに宿泊代。ホテルはいつの旅でも三つ星以下でしたが、それでも 5 泊となると結構な額になります。そこで「あなたが代表して」との妻の言葉に送られての旅となったのでした。私は「狭くても泊まれるだけでいい」との思いで二つ星に近い三つ星のホテルを予約した次第です。